



## 窓

### ヨーロッパリゾート 「北欧の森」



福島県南会津郡・台鞍山スキー場から徒歩1分の絶好な場所にある、ペンション・北欧の森。オーナー夫妻が、2人のスウェーデン人と知り合ったことがきっかけで、スウェーデンに興味を持ち、様々な縁が重なり昨年12月にスウェーデン風ペンションをオープンした。全て木目調の造りはスウェーデンを彷彿させ、玄関を入るとすぐにスウェーデンの民芸品などが置いてあり、とても暖かい感じがする。都会の雑音や多忙な生活に疲れたら、ここ「北欧の森」で、心身ともに癒してみたいかでしょうか。JISS会員またその家族の皆様は、宿泊料10%割引です。



<http://www.digitalspider.net/hokuou>

Photo/右下・中嶋千絵 (dill com)  
他は北欧の森提供

スウェーデン社会研究所 所報  
No.321  
2001年10月15日発行

発行所：社団法人スウェーデン社会研究所  
〒105-0013東京都港区浜松町1-8-1  
(株)科学新聞社内5階  
Tel. 03-5776-1835 Fax. 03-5776-1836  
URL <http://www.sci-news.co.jp/sweden/>

発行人・編集責任者：川崎一彦  
Publisher&Editor in Chief: Kazuhiko Kawasaki  
編集：松元さきり  
Editor: Sagiri Matsumoto

#### ■目次

ニュース	2
Norway Topic - 消費税率改正より/JISSニュース	
研究紹介	6
スウェーデンにおけるトルコ系移民の間き取り調査を通じて	
シリーズ	8
北欧における日本関連大学および研究所の紹介-2	
・SENTE	

サロン	10
Sweden A to Z-2/日瑞の学校経営の違いについて/やさしいスウェーデン語・ミニ講座-2/ Lund滞在記-3・4/Books	
JISSインフォメーション	14
会員動向/イベント情報	

Norway Topic

大橋照美

大橋照美 ● Ms. Terumi Ohashi  
ノルウェー体育大学特殊教育分野  
障害者スポーツ指導コース

消費税率改正より

●  
昨年の秋、ノルウェー国会において、2001年7月1日付けで食料品分野の消費税率(商品やサービスに対して取引の段階で課税される間接税。)を現在の24%から12%への改正を決定した。食料品分野の中でも引き下げ対象商品は、噛む、舐める、飲む、食べる対象の物となっている。その中でも、水道水、酒類、タバコ、薬品、歯磨き粉、家畜、活魚等は引き下げ対象外となっている。

ノルウェー国会では今回の食料品分野消費税率引き下げに伴い、新たな税金収入確保のため、消費税対象項目を大幅に増加した。今までは対象外であったが今回新しく対象となった項目は、司法関係(弁護士費用など)、工事、修理、清掃、引っ越し等、自動車学校(運転免許書取得の際)、セキュリティシステム関係(用品、警備員)等である。また、医療関係では、獣医、針灸、マッサージ、美容整形、エステティック等が項目入りしている。

参考までに、ノルウェーで現在もお消費税対象外となっている項目に、保険、銀行、株関係、観光ガイド、ホテル、交通機関等、入場券(例、映画、コンサート、美術館、スポーツ観戦等)がある。

7月1日より消費税改正がスタートしているが、ある大きな問題点が生じている。それは飲食店

での店内飲食とテイクアウトでの商品税率格差である。例えば、ハンバーガーを店内で食べる場合消費税24%、同じ商品をテイクアウトする場合消費税12%となる。コーヒー、ジュース等も同じであり、特にこの状況が頻繁に生じるファーストフード関係の飲食店では、店内用とテイクアウト用の料金設定、レジの改造、従業員指導等の急速な対応に迫られている。しかし、飲食店関係者によると、消費税改正がスタートしたのにも関わらず、この改正の明確な規則を理解していない店長、オーナー、消費者が多く、2つの料金設定への方針を定めていない店がほとんどなのである。これらの原因としてはノルウェー政府による、サービス、食品、小売業界関係者、国民への情報提供不足が考えられる。

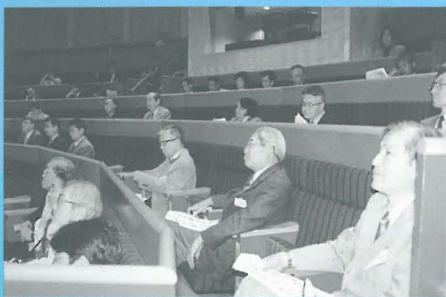
ノルウェーではスウェーデン、デンマークに比べ圧倒的に食料品、酒類の値段が高いため、隣国へ買い物に出かける人が後を絶たない。この食料品分野消費税引き下げは国民の大きな願いであった。税率が12%も引き下げられ、では商品の値段は? ふたを開けてみたところ、商品の値段は以前とそれほど大きな違いはないようである。その分、他のサービス分野での消費税対象項目が増加し、国民のこの改正への疑問の声は当分途絶えそうもない。今後の傾向に注目していきたい。

(Newspaper /Aftenposten, VG より)



ノルウェー・バイストレーンヘルススポーツセンターの利用者とバーベキューを楽しむ筆者(右から2人目)

### 記念講演会 「日瑞間の科学技術政策の現状」



6月13日(水)、スウェーデン大使館オーディトリウムにて、「日瑞間の科学技術政策の現状」と題した講演会を開催した。

一昨年、日瑞間において科学技術協定が締結された。そして昨年は、日本学術振興会のバックアップによって、専門家同士のセミナーがストックホルムで開催され、今年も引続き行われる。また来年は、ノーベル賞授賞100周年を記念し、ノーベル財団による移動ミュージアムが日本でも開催される予定である。更に今年5月31日には、ストックホルムに、日本学術振興会の海外研究連絡センターが開設された。上記のように、日瑞間の学術・科学技術交流が活発化してきている。この様な背景もあり、日本学術振興会ストックホルム事務所開設と、日本スウェーデンサイエンスクラブ再立

上げを記念し講演会を開催した。クリステル・クムリンスウェーデン大使より貴重なご挨拶を頂き、日本スウェーデンサイエンスクラブ会長・池田研二氏より、諸般の

事情により一時休眠状態であったサイエンスクラブのご説明、また、再立上げへの意向をお話しいただいた。その後、日本学術振興会理事長・佐藤禎一氏より、ストックホルム研究連絡センター開設に伴ない、今後の豊富などが述べられた。

スウェーデン大使館科学技術部参事官レナート・ステンベリ氏により、「スウェーデンにおける科学技術行政及び日瑞交流の現状」、文部科学省科学技術政策局国際交流官・吉尾啓介氏により、「日本の科学技術新体制と日瑞科学技術交流への取組み」、そして、宇都宮大学農学部教授・遠藤勲氏により、「日本におけるマイクロサイエンスアンドナノテクノロジー」と題し、ご講演いただいた。その後、場所を大使館内のクラブルームへ移し、懇親会で参加者同士の交流

が行われ、盛況ののち会は終了となった。



クリステル・クムリン スウェーデン大使より貴重なご挨拶をいただく



本研究所松前理事長の乾杯にて、懇親会がスタートした

### ボルボ ミッド・サマー フェスタ in 台鞍 23-24 June, 2001



メイポールを囲み、夏至祭のダンスをする

「Life...日本からスウェーデンへ」をテーマに開催された今年初めての夏至祭は、福島県南会津郡台鞍山スキー場で行われた。東京からヤングチェンバーのメンバーであるスウェーデン人が到着し、横たわ

っていた白樺の木に、色とりどりの草花が飾られた。さすがに手馴れたものだな〜、と出来ゆくメイポールを遠くで眺めていた。あいにく天気は小雨交じり。主催である、レストランリラ・ダーラナ大久保シェフによる挨拶の後、メイポールを囲み輪になってダンスが始まった。スウェーデン人にとって夏至祭は、特別な意味合いを持つ。長く厳しい冬を乗り越え、待ち焦がれていた夏を迎える喜びはひとしおであろう。白夜の中、人々は体全体で喜びを表し、過ぎ行く夏を堪能するのだ。夜は、大久保シェフによる豪華なスメルゴスボードだ。

スウェーデンでは、8月7日に解禁されるザリガニを一足先にいただいた。また、トナカイの肉料理も珍しい。にしんの酢づけ、ミートボール、ヤンソンの誘惑ほか多様なスウェーデン料理が、テーブル狭しと並んでいる。夕食後、第2会場であるペンション北欧の森に場



スウェーデンでは、8月7日に解禁されるザリガニ

News of JISS

JISSニュース

を移し、キャンプファイヤーの宴で幕を閉じた。“夏至祭を通じて、日本にいながらスウェーデンを体感する”という目的を達した感である。今後、毎年夏至祭を開催する予定だそうだ。今年見逃した方は、来年参加してみてもはどうだろう。



skål! (スコール:スウェーデン語で乾杯の意)にて、豪華なスウェーデン料理でのディナー

ノーベル会議議長アニタ・アペリア  
カロリンスカ研究所教授来日

我が国の科学技術政策の基本となる科学技術基本計画(第二期)の基本理念において、ノーベル賞に代表される国際的科学賞の受賞者を欧州主要国並に輩出すること(50年間にノーベル賞受賞者30人程度)が明記されている。(株)科学新聞社でもかねてより、日本からのノーベル賞受賞者が一人でも多く出るよう、様々な活動に取り組んできた。こうしたなか、ノーベル会議議長を務めるアニタ・アペリア・カロリンスカ研究所教授(小児科学)が科学技術国際交流議員連



アニタ・アペリア教授(右)と科学新聞社社長・池田富士太氏

名主催による講演会等に出席のためこのほど来日。多忙なスケジュールをさいて、(株)科学新聞社社長また本研究所理事及び事務局長でもある池田

富士太氏の  
単独インタ  
ビューに応

じた。◎ノーベル賞の歴史はすでに一世紀を越え、世界で最も権威ある賞として広く認知されていますが、このノーベル賞が科学の世界を含め一般社会に与えた影響について先生のお考えをうかがわせて下さい。

『難しいご質問ですが、一言で言えば、一般の社会とくにある程度の教育を受けた人達に対して、科学とはどんなものであるかという、見識を高めるのに大きく貢献したと思います。つまり、必ずしも科学者に限らず、他の分野にいる多くの人々に非常に権威ある賞として受け止められ、広く報道される結果として、政治家や企業家といった方々がそれを学んでくれる。それを通じて科学というもの的重要性を理解してくれる、そうした効果があったと思います』  
◎先生からごらんになって、日本の科学研究のレベルはいかがですか。

『これはお答えしやすい質問ですね。日本の科学者の研究レベルは非常に印象的な発展を遂げています。自分の専

門である医学、生物医学についてしか自信を持って言えないのですが、非常に優れた研究がなされ、大いなる進展が出てきています。ですから私にとって、日本という国は興味を持って見守っていききたい国なのです。それから、日本から発信される科学研究に関する論文や記事、報道がどんどん増えてきていることも注目されます』

◎日本国内では、ノーベル賞受賞者数に関して、これまで少なすぎたのではないかという声が高まってきていますが、この点についてはいかがですか。

『その点に関してお話しておかねばならないのは、ノーベル賞というのは、その年に行われた発見に対して授与されるものではないということです。まず第一に、私たちが検証しなくてはならないのは、それが本当の意味での新発見と呼ぶに値する業績であるかどうかということです。これは、即座にわかるというわけにはいかない性質のものです。そしてまた、その発見自体がどの程度の重要性を持っているかも見極めなければなりません。こうしたことを確認し、検証

するためには少なくとも10年はかかる。つまり、ある発見がなされてから、それを正しく評価するには10年は必要だということです。ただ、日本について次のことは申し上げておきたいと思います。こちら側からは、東大、慶大、阪大など日本の多くの大学等に対して、推薦の依頼状を出しているのですが、それが日本の国内で適切に処理されているのかについては、私はいささか疑念を持っています。非常に優れた学術研究機関であれば、推薦の依頼状が来ているかどうかをこちらに問い合わせることができるし、特定の大学を推薦の依頼状送付先として推薦することも可能です。こうした推薦に関わる作業を適切に行うことは、極めて大事なことといえます。まさか、机の上に置きっぱなしということはないでしょうか』

◎日本が、例えば米国のように世界各国の優秀な人材が活躍する舞台を整えていくためには、どのようなことが必要なのか何か御示唆いただければ。

『日本には非常に優れた若い科学者、研究者が数多くいらっしゃる。極めて優秀な人的

資源をお持ちです。それはアメリカに比べても決してひけをとらないと思っています。ただ、現状をよりよいものにしたりにていくことは当然必要なわけで、よい研究環境をもう少し増やしてあげたらと感じます。そして、若い研究者にもっと独立性を与え、国際交流を今よりさらにずっと増やすことが大切です。また、これも肝心なことです。女性の研究者をもっともって増やすべきだと思います。人口の半分を占める女性を、知的資源という意味で無駄にしてはいけません。日本の女性研究者は、まだまだ少なすぎるように見受けられます。私の専門分野に関わることで、アメリカが有利だと思われる点は、臨床の場である病院において、日本に比べはるかに多くの研究が行われていることです。人類のために役立つような重要課題の解決に貢献している。なぜなら、そうした研究がすぐに、いわゆる基礎研究にフィードバックされて、そしてまた研究が進められるからです』

◎最後に、21世紀における科学研究、とりわけ基礎研究についての展望をお聞かせ下さい。

『今やまさに、基礎研究にとつ

ては極めてエキサイティングな時代、将来性に満ちた時代といえるでしょう。そうした流れを受けて、今後10年の間に非常に多くの確実性のある発見、人類の発展に貢献する発見がなされるものと期待しています。それは、極めて広範な分野において起こりうることであり、どんな分野においても発見すべきことはまだまだたくさんあるということです』

●2001年7月20日号科学新聞より転載したものです。科学新聞は、週刊金曜日発行、購読料1ヵ月1,835円(税込)。購読を希望される場合は、JISS事務局、または下記までご連絡ください。

(株)科学新聞社

TEL 03-3434-3741

Fax 03-3434-3745

E-mail: edit@sci-news.co.jp

## 談話会 ①スウェーデンと日本生活文化習慣の比較

9月1日(土)、JISSイベントルームにて、「スウェーデンと日本・生活文化習慣の比較」と題した談話会を開催した。講師には、JISSスウェーデン語講座専属講師として、流暢な日本語とフレンドリーな人柄でお馴

染みの、ステラン・ホルスト氏を招きお話いただいた。ホルスト氏は、1972年来日し、今年で在日29年目になる。日瑞間の生活に基づく様々な相違点などを中心にお話していただく予定ではあったが、後半に設けた参加者の皆様との交



ステラン・ホルスト氏と参加者の皆さん

流の場では、主に福祉についての質問が相次いだ。やはり、スウェーデンの福祉政策に関心が深いということ改めて実感した。参加者の皆様から、身近な話題を中心に分かり易かった、講師の素朴な人柄が良かった、体験に基づく具体的な内容で興味深かった、な

どの感想をいただいた。予定の時間をだいぶオーバー

してしまう程、参加者の皆様のご質問は尽きなかったのだが、終始和やかな談話会となった。

### スウェーデンにおけるトルコ系移民の聞き取り調査を通じて

榎田 真

榎田 真 ● Mr. Makoto Kashita  
2001年6月までストックホルム大学  
International Graduate Program  
に在学

ストックホルム大学に在学中、私は郊外のとあるベッドタウンに暮らしていた。ストックホルム中央駅から地下鉄で40分程のところだったが、ここにはスウェーデンに関するどんなガイドブックにも恐らく書かれていないであろう空間が広がっている。道行く人々は、中東、東ヨーロッパ、アフリカなど様々な出身を持つ人が大半だ。スーパーに行けば、イスラム教徒向けの食材や、ありとあらゆるスパイスが並んでいる。スウェーデンには多くの移民が暮らしているが、その地理的な分布は相当に偏っていて、私が暮らしていた地域のように、主として非ヨーロッパ圏からの移民が集中している場所が数多く存在する。

●  
移民と一口にいっても、民族的な背景や社会的なバックグラウンドは極めて多様だ。スウェーデンにきて間もない人もいれば、スウェーデンで生まれ育った人も少なくない。「スウェーデンで育った移民達は、どのようなアイデンティティを持っているのだろうか？」ある日、そんな興味が沸き起こった。私は以前に、在日韓国人のアイデンティティに興味を持っていたこともあり、二つ以上の文化的背景を持つ人々のアイデンティティには強い関心があった。私は修士論文のために、移民達への聞き取り調査を行う事を決めた。そして、彼らがどのようなアイデンティティを持っているかを議論することによって、移民を取り巻くスウェーデンの社会的状況の一側面を浮かび上がらせる事を自分の研究の目的にした。

●  
実際にインタビューしたのは、トルコから若い頃にスウェーデンにやってきた4人。いずれもスウェーデンで大学を卒業し、今はそれぞれ職業を持っている。彼らへのインタビューを通して、興味深い点が見えた。

マイノリティーのアイデンティティというと、自らの民族的出自と移民先の土地のどちらに帰属意識を持つかという二元論で議論される事が多いが、彼らは自らのアイデンティティを単純な形

で規定する事はしない。私がインタビューした人々は皆スウェーデンの市民権を持っているが、「国籍」は「アイデンティティ」とは全く違うものだという。一人は、「海外に留学するときには、スウェーデンの市民権がないと学費を政府から借りられない。だからスウェーデンの市民権を持っていたほうが絶対便利。」と実利的な面を強調するが、「自分をスウェーデン人だと思ったことは一度もない」そうだ。しかし、トルコ人としてのアイデンティティを持っているかといえば、そう簡単な問題でもない。インタビューした人達の何人かは、スウェーデンに来てからも、トルコの故郷を訪れる機会があったという。そこで彼らを感じたことは、自分たちがトルコに暮らす人達とはまるで違うという事だった。価値観や生活習慣などの面で、スウェーデンから受ける影響は相当に大きなものである。

◆  
スウェーデン人に向かって、「あなたは自分を何人だと思えますか？」と尋ねたら、ほとんどの場合怪訝そうな反応が帰ってくるだろう。国籍・民族・言語・文化などが一致しているのが当然であると考えられている共同体の中では、この質問は極めて不自然に響く。自らのアイデンティティが流動的な状況を、マジョリティの視点から理解することは難しい。

◆  
二つの文化的背景を持つ彼らにとって、アイデンティティ探しは切実な問題だ。「スウェーデン人でもなく、トルコ人でもなければ、自分はいったい何者なのか？」いろいろ話を聞いていくうちに、彼らはかなりの「アイデンティティ・クライシス」を経験してきているという事がわかった。さて、彼らはいかにしてその状況を乗り越えたのだろうか。インタビューの中で明らかになったのは、程度の差はあれ、国籍にしばられない形で新しいアイデンティティのモデルを構築することが彼らのたどり着いた一つの答えであるという事だ。例えば、彼らは自らの出身地の文化に強い誇り

を持っている。そしてそれと同時に、スウェーデン社会から受けた影響も、自らのアイデンティティの一部として積極的に肯定する傾向がある。



日本人同様、ほとんどのスウェーデン人も「自らのアイデンティティは何か？」などという事をあらためて考えることなどない。しかし、今回インタビューした人々にとって既成のモデルとなるアイデンティティはない。自らの中にある多様な文化的要素を材料にして、自分にあつた新しいアイデンティティを仕立てなくてはならないのである。

もともと、彼らを典型的なケースと考える事には無理があるかもしれない。彼らの場合、スウェーデンでの生活や教育を通して、自分と同じ民族的背景を持つ人々だけではなく、スウェーデン人達と触れ合う機会も比較的多かった。よって、異なる文化の中から自分にあつた要素を取捨選択することも可能であつたとはいえないか。そしてそれは、移民のバックグラウンドを持ちながら、スウェーデン社会で生き抜いていくために必要なトレーニングにもなっている。しかし現実には、多くの移民達の社会的空間はマジョリティ集団から分断されている。このインタビューに協力してくれた人々と同じ道を、すべての移民達がたどる事ができるわけではないのである。



今回の調査では、ごく限られた数の人々にしかインタビューする事ができなかったが、今回の研究の結果に基づいてより多くのケースに目を向けていくことが必要と思われる。また、アイデンティティの研究は、「移民の社会的統合」の可能性を議論する上でも重要だ。生活空間や労働市場が、移民とマジョリティの間で分断されている状況が議論されるとき、「それは移民達自身の決断であるから仕方がない」という決まり文句がよく聞かれる。しかし仮にそうであるとしても、考えるべきはその「決断」の背景となる理由である。もし、自分がスウェーデン社会の一部として受容されていないと感じていたら、そして、そうしたア

イデンティティが実際の社会的状況から醸成されたものだとしたら、アイデンティティと「移民の統合」の複雑な関係が浮かび上がってくるのではないだろうか。

RESEARCH UNIT FOR  
URBAN AND REGIONAL  
DEVELOPMENT STUDIES

[SENTE]

University of Tampere,  
Finland



### *Bases of Sente activities*

The developed economies are shifting from industrial society towards post-industrial society, called, for example, information or network society. Consequently, knowledge, learning and innovation have emerged as key themes in promotion of regional development. At the same time, the significance of administrative and functional border crossing networklike co-operation has increased. Earlier the borders of regions, institutions, sectors and organisations defined the location and position of actors. Nowadays the position of regions and organisations is defined more often by knowhow and ability constantly to raise the innovative capacity and capabilities and therefore the need for co-operation between research and development activities is higher than ever before. In Research Unit for Urban and Regional Development Studies interaction between research and practice is a continuous learning process.

### *Business idea*

Sente is a research unit intended to serve regional and especially urban development. Its basic mission is to increase the understanding of the dynamics of the development processes from the perspective of competitiveness, planning and management. Sente is serving as an R&D unit for urban and regional development. The aim is to develop new approaches and methods for the promotion of urban and regional development. The activity of Sente is financed by projects, it will work as long as there is a demand for its research and development services. The research objects may be situated anywhere at all.

The main objective of Sente is to strengthen the theoretical bases and create practical applications for promotion of strategic development in urban regions and to establish a creative and dynamic mode of action which supports the researchers' personal commitment both to the activities of Sente and the future of each individual.

On the specific level research addresses the following themes: a) *Innovative regional development* - to develop and analyse the development concepts based on knowledge, knowhow and innovation; b) *urban competitiveness and economic development policy in the information and network society* - to recognise elements of knowhow and innovation based development in the future; c) *planning and management in the network society* - to analyse the development networks and to develop their strategic activities and d)

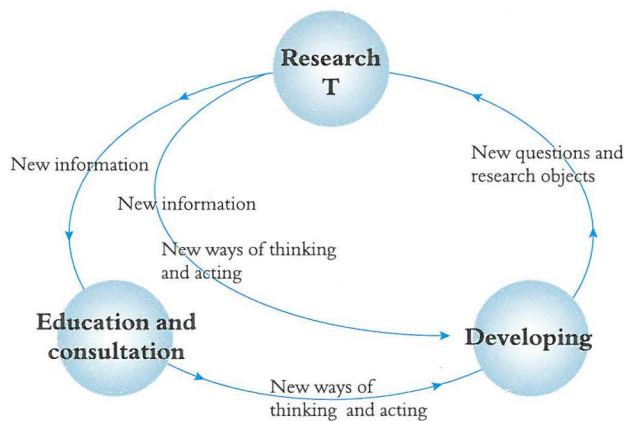


FIGURE 1. The point of departure in Sente activities : continuous interaction between research and practice .



*firm networks and economic clusters* - to analyse the interplay between the global and local dynamics of economic activity.

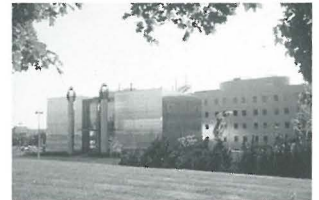
Sente has carried out, for example, following projects: "Borderless South-Ostrobothnia: creating new policy-making and management approaches for a world of shared power" (financed by Town of Seinajoki, Regional Council of South-Ostrobothnia and European Social Fund); "Quality of living environment in urban competitiveness" (financed by the cities of Helsinki, Tampere, Turku, Jyväskylä and the towns of Pori and Seinajoki); "Management of change and creative tension: Kainuu region as a case in point" (financed by the Association of Finnish Local and Regional Authorities, the town of Kajaani, the Regional Council of Kainuu and the Employment and Economic Development Centre of Kainuu); "New knowledge creation process for technology foresight in Tampere region" (financed by Regional Council of the Tampere region and TEKES - National Technology Agency) and "In Search of Process Based Regional Development Policy" (financed by Nordic Senior Officials' Committee of Regional Policy).

### *Sente philosophy*

In the game of GO sente means literally 'the leading hand', but is best translated by the words 'having the offensive'. Sente merely means that the player having it can compel his adversary to respond to his moves or else sustain worse damage. At all events having sente

is an advantage, but it is not a static state, rather it is a dynamic never-ending endeavour to seize it, as is the research unit operating purely on demand based funding too. In the Research Unit for Urban and Regional Development Studies, Sente refers to a *never-ending endeavour to be a forerunner in one's own field, it is a quest for "something new"*.

Sente's research work focuses on various decentralised systems, it focuses on games played in various regional and urban policy fields characterised by shared power. *In a networked world sente refers to a continuous endeavour to transcend inward-looking aims of the various organisations and to find "third solutions" and thus promote shared interests and objectives.* Therefore managers should be able to become increasingly skilled in managing change and networks. They will have to learn to ride out turbulent conditions by going with the flow, recognising that they are always managing processes and flux rather than stability defining the order of things. In this kind of world the managers' role in urban economic development is, for example, to locate possible partners, and to induce them to become in some way involved in urban/regional development partnerships. *In regional management sente refers to a continuous endeavour to govern change and manage networks so that change may not govern us and so that networks do not begin to live lives of their own.*



Research Unit for Urban and Regional Development Studies is a research group of thirteen people and it is lead by professor Markku Sotarauta (see more: [www.sjoki.uta.fi/sente](http://www.sjoki.uta.fi/sente)).

Sweden A to Z  
Vol. 2

スウェーデン  
ア・ラ・カルト

東海大学北欧学科  
非常勤講師

速水 望

速水 望 ● Ms. Nagame Hayami

『få』

動詞の“få”には色々な用法があるのだが、一般的に知られている用法は本動詞としての「貰う」、例えば“Kan jag få ett glas vatten?”「お水を一杯いただけますか?」や“Du får öppna dörren”「ドアをあけてもよい」に見られる許可を表す助動詞等ではないであろうか。“få”はかなり使用頻度の高い動詞であるが、意外とその多様な用法は知られていない。そこで、これからスウェーデン語を学ぶ人、今学んでいる人にとってうまく“få”を使いこなして頂く為に“få”の様々な用法を紹介したい。

まず初めに“få”の用法を整理してみる：

本動詞として

1. 貰う

“Han ska försöka få arbetstillstånd.”「彼は労働許可を貰えるようにする」

ここでは“få”は未来を表す助動詞の ska と「試みる」という意味の försöka という動詞に先行されているので、直訳すれば、「貰うことを試みるであろう」となる。このように一つの動詞が別の動詞や助動詞に先行されることも数多く有る。

「貰う」とは誰かから何かを与えられる行為であるが、中には具体的な人が存在しない文もある。例えば“Hon ska få tid till studier.”「彼女は勉強の為に時間を持つであろう」や“Jag får råd att köpa bil.”「私は車を買うお金を持つことになるであろう」では日本語に翻訳してみるとより明らかになるが、本来の「貰う」という意味が無くなっている。このように、特に漠然と未来の結果を表すときに“få”が使われる。

「貰う」とは先の例文でも見てきた通り、本来肯定的な意味で使われるが、スウェーデン語においては否定的な内容においても使われる。例えば、“Flickan fick stryk.”「その少女はお仕置きを受けた」

助動詞として

2. 許可

“Jag får inte köra bil för jag är bara 15 år.”「私はまだ15才なので車の運転をしてはいけない」これは例文のように助動詞の“få”が否定語の inte を伴っていると「禁止」を表す。また別の例で、“Får jag störa dig en stund?”「少しの間お邪魔してもよろしいですか」のように「～してもよいか」と相手の意向を尋ねる時にも使える。

スウェーデン語は主語と述語が文章の中に必ず必要になってくる。例えば日本語で「雨が降っている」という文は動詞の“regnar”を使うのであるが、“regnar”

は日本語の「雨が降る」という意味にあたる。一見日本語を見ると「雨が」が主語の役割を果たしているが、同じ文章のスウェーデン語には主格がないので、それに代替するものをもってくるのだが、こういった非人称構文においては非人称主語の det を用いる。前置きが少々長くなってしまったが、動詞の“få”はこの非人称主語に伴って使われ一般的な事柄を表すことができる。例えば、“Det får inte ske!”「起きてはならない」

3. 強いて～させる

“200 personer får lämna sina jobb.”「200人の人は仕事を辞めなければならない」

“Jag fick stå ute i regnet och vänta.”「私は雨の中立って待たされた」

先程、否定的な意味を持つ“få”について触れたが、上記の文はよく似ている。このように「～せざるを得ない」という意は特に上記の様に短い文章だと解釈しにくいかもしれないが、文全体の意味を把握した上で考えて見るのがよいであろう。

同じように強いて～させるという表現に肯定的なものもある。

“Jag får tacka så mycket.”「どうもありがとう」意味は「どうもありがとう」を表す“Tack så mycket”と全く同じであるが、ニュアンスは「慎んでお礼を言わせて貰う」と、より誠意がこめられている感じを受ける。

さて、いろいろな用法を見てきたわけだが、次の文章を読んでその解釈の仕方を考えて頂きたい。

“Jag fick åka till Japan.”

訳は「私は日本へ行きました」となる。しかし、まったく違った二通りの解釈をすることができる。先ほど挙げた用法の2.許可、3.強いて～させるを参照して頂きたい。2.の許可としてとるなら、「私はよいことにも日本へ行きました。」しかし、3.の強いて～させるととるなら「私は(自分の意志と反して)日本へ行かされてしまいました。」と解釈することができる。それでは一体どうやって話者の真意を理解すればよいのであろうか。口語体においては抑揚である。どのような口調で語っているのか、また前後の関係にもよく注意することが大事である。又、口語体でよく使われるのが“Du får ringa mig!”直訳すると「あなたは私に電話してもよい」となるがスウェーデン人にとって「電話してね」程度の感覚なのである。今回は動詞の“få”を見てきたが、ただ「貰う」や許可を表す助動詞としてではなく、その裏にはいろいろなニュアンスがあるということがお分かり頂き、今後の学習に役立てて下されば幸いに思う。

## 日瑞の学校経営の違いについて

京都大学大学院  
教育学研究科修士課程1年

大城 愛子

JISS会員

大城 愛子 ● Ms. Aiko Ohshiro

しばらく前から、日本の教育現場において様々な問題が噴出し、硬直化した教育制度が批判の対象となっていることは、多くの方がご存知のことだろう。日本においては、長年、文部省(現文部科学省)が学習内容を細かく定めてきた。それにより、全国的に均質な教育を実現してきた反面、学校に裁量権がなく、子どものニーズに応えることがおそかにされてきたのも事実である。この状況を打破するために、学校に今まで以上の裁量権を与え、学校経営を弾力化することが目指されている。それでは、世界に名だたる福祉国家として、国民一人一人にきめ細かい社会サービスを提供してきたスウェーデンでは、一体どのような学校経営が行われているのだろうか。ここでは、昨年9月に行った、ノルシェーピングのリンデー基礎学校の校長先生へのインタビューもふまえて、スウェーデンの学校経営について紹介させていただきたいと思う。

学校の裁量権の中心にあるのは、カリキュラム、人事、予算の決定権である。スウェーデンにおいては、その権限のかなりの部分が学校に任されている。カリキュラムについては、中央政府により大枠は定められているものの、授業時間の配分や運用は校長と教員が決めることができる。また、各学校が自由に内容を決める自由裁量時間も多く、学校によって特色のあるカリキュラムが出来上がっている。一方、日本では、時間の配分や内容は文部科学省により定められ、どの学校も同

じようなカリキュラムで授業を行っているのが現状である。ただし、学校が自由に内容を決められる「総合的な学習の時間」の導入で、今後各学校が独自色を出せるか、注目されるころではある。予算については、スウェーデンでは学校に一括して予算が与えられ、校長と教員がその配分を決定し、学校経営に関わる全ての費用(教員給与、教材等)がそこから賄われる。残念ながら、日本では自由予算がまだ少なく、学校が何をすることも費用面がネックとなることが多い。私が卒業した小学校では、最近もカーテンを買い替える予算を捻出できず、保護者から募金を集めたという話を聞いた。それ以外にも、スウェーデンでは人事権や一学級あたりの生徒数を決める権利が校長にある等、日本に比べてはるかに弾力的な学校経営がなされている。また、親や子どもの要望を聞く機会も設けられており、それについては、リンデー基礎学校の校長先生が、学校側は常に生徒とその親に近い位置で学校を運営し、彼らの要求に可能な限り応える義務がある、と度々強調されていたのが印象的であった。しかしながら、いくらスウェーデンの学校経営のやり方がよく見えても、そこには問題点もあろうし、他国でうまく機能しているシステムをそのまま日本に移植するのは不可能である。それでも、スウェーデンを1つのケースとして取り上げることで、日本の教育を考える上での何らかの提言を行っていったら、と考えている。

## Coffee Break

### やさしいスウェーデン語 ミニ講座②

今夏、スウェーデンを訪れた方も多いことと思います。春から夏への訪れは、映像を見ているかの如く見事な移り変わりで、あっという間に野原一面に花が咲き乱れる情景は、言葉では言い難い程の感動を与えてくれます。そして長い冬への到来に向け秋は短くやってきます。今は、黄葉に輝く木々の間から、木漏れ日となって陽光がさしこんでいる頃でしょうか。

●  
お元気ですか? : Hur står det till? (ヒュールストールデティル?), はい、元気です。貴方は? :

Tack, bra. Och du? (タックブラ、オデュ)、貴方に会えて楽しかったです : Det var trevligt att träffas (デバトレヴリグアトレファス)、どこに住んでいるの? : Var bor du? (ヴァーボーデュ?), 東京に住んでいます : Jag bor i Tokyo (ヤーボーイトーキョー)、いくつですか? : Hur gammal är du? (ヒュールガンマルエデュ?), 私は20歳です : Jag är 20 gammal. (ヤーエーシューゴガンマル)、またお会いしましょう : Vi ses igen (ヴィセスイーエン)、どこで会いましょうか? : Var ska vi träffas? (ヴァースカヴィトレファス?)  
●  
[数] 0(noll, ノル)、1(en/ett)、エン、エット)、2(två, トウヴァ)、3(tre, トレ)、4(fyra, フィーラ)、5(fem, フェム)、6(sex, セクス)、7(sju, シュー)、8(åtta, オッタ)、9(nio, ニーエ)、10(tio, ティーエ)、11(elva, エルヴァ)、12(tolv, トルヴ)、13(tretton, トレットン)、14(fjorton, フェートン)、15(femton, フェムトン)、16(sexton, セクストン)、17(sjutton, シュートン)、18(årton, オートン)、19(nitton, ニットン)、20(tjugo, シューゴ)、30(trettio, トレットィオ)、40(fyrtio, フェットィオ)、50(femtio, フェムティオ)、60(sextio, セクスティオ)、70(sjuttio, シュットィオ)、80(åttio, オットィオ)、90(nittio, ニットィオ)、100(ett hundra, エットフンドラ)

# サロン ▼ ルンド滞在記—Vol.3・4

Books

Living in LUND

ルンド滞在記  
Vol.3・4

矢幅 さやか

矢幅 さやか ● Ms. Sayaka Yahaba  
2001年1月～6月までルンド大学  
ISUプログラムに留学

## ルンド滞在記—3

早いもので、ルンドでの生活も4ヶ月目に入りました。相変わらず気温は低く、今だに夜はマイナス近くまで冷え込むこともあります。先週は雪が降りました。さすが北歐・・・と思ってあまり気にしていなかったのですが、どうやら今年は特別寒いようで、みんな「冬が戻ってきた!!」と言っては、短い春夏の訪れを今や遅しと待ち望んでいます。そんな寒さの中でも、3月25日からのサマータイムに合わせたかのように、日だけは確実に長くなってきています。1月に初めて来た時は、夕方4時前に日が落ち、長い長い夜だったのですが、今では8時頃まで明るさが残るようになりました。天気の良い日は夕暮れ時が本当に美しく、澄み渡った明るい空が徐々に赤く染まり日が傾いて行くのを、時間が経つのを忘れて眺めたりしています。寒くても、確実に春の訪れを感じる今日このごろなのです。そしてもうすぐ「1年中で一番美しい。」と現地の知り合いが太鼓判を押す5月になります。公園は太陽の光を求める人々で連日いっぱいになるそうです。長い冬に備え、みんなエネルギーの充電をするのでしょうか?!

ルンドでの生活を通して一番感じるのは、人々が自然体でのんびり生きているということです。お店はほとんどが18時頃に閉まるので、18時以降は街が静かになります。日曜日はほとんどのお店が休業日のため、街に人影がなくひっそりしています。そしてその代わりに土曜日が「買い物の日(外出の日)?」のようで、ルンドにこんなに人が住んでいるのかと思うほど、家族連れで賑わい、活気に溢れています。街の状態を見れば、何曜日の時頃なのか自然に分かってしまうほどその差は明瞭です。太陽が顔を出せば外へ出て、休みの日は家でのんびりする、というように自然に逆らわず順応して生きている人々の生活が、私はますます好きになっていきます。

## ルンド滞在記—4

早いもので、ルンド滞在5ヶ月が終了しました。耳も凍るような零下の寒さを経験し、徐々に日が長くなるのを肌で感じ、美しい春の訪れと共に賑わう公園でのピクニックも経験し・・・そして待ちに待った夏!!というこの時期に帰国することを本当に残念に思います。この5ヶ月間、日本を恋しく思ったことは一度もありませんでした。異国の地ルンドで一番感じたことは、『人間はひとりひとり違うものであり、だからこそ面白い』ということです。日本では、頭で解っていても、環境的に(関わるほとんどが日本人なので)それを受け入れる事がなかなか難しいような気がします。

スウェーデンには、海を渡り陸続きの国を通して様々な人種が集まっています。特にルンドは大学都市ですから、ヨーロッパ諸国からは勿論のこと、世界各国からの交換留学生でいっぱいです。生まれ育った環境や生活習慣、言語、思考回路の全く違う人間が混在する環境で生活していると、何を見ても聞いても『なるほど、そういう考え方もあるのか』『そういうやり方もあるんだな』と、自然に受け入れられるようになります。そして自分自身の中でも『周囲に順応しなければ』という変な焦りが消えます。自分の生き方を大切にしつつ、全く考えの違う他人とお互いを尊重し合う毎日、とても興味深く楽しいものでした。言語もさることながら、このような考え方が自分の中に入りこんできたことをとても嬉しく思っています。人間の優しさや心のゆとりを教えてくれたスウェーデンに感謝しつつ、帰国することにします。

ルンドの一風景



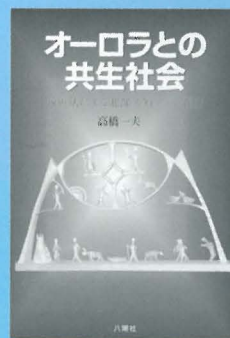


「北欧のことば」

A.カーカー、B.リンドグレン、  
S.レーラン 編  
山下泰文、森信嘉、福井信子、  
吉田欣吾 訳  
東海大学出版会 3,000円(税別)

北欧五カ国にはスウェーデン語、ノルウェー語、デンマーク語、アイスランド語、フィンランド語に加え、フィンランド・スウェーデン語、スウェーデン・フィンランド語、サーミ語、フェロー語、グリーンランド語など、八つの諸言語がある。

本書ではそれら北欧の諸語の構造と特質を分析・紹介するものであるが、単なる言語学に留まらず、北欧各国・各民族の歴史的・政治的な背景を押さえつつ、言語文化論的な視点を特徴とする。邦訳の少ない北欧諸言の総合的な入門解説書。



「オーロラとの共生社会」

高橋一夫 著  
八朔社 1,800円(税別)

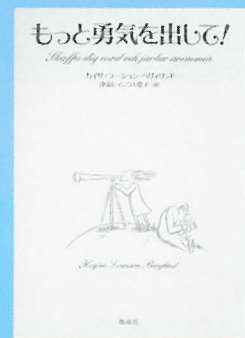
『ウップサラ物語』に続く、スウェーデン紀行第二弾。人類の願望である自然との共生が、しばしば資本と欲望によって剥離され、無惨にも残滓として堆積しつつあるのが現状である。太古の昔から続くこの天空は、オーロラという共生指標で現代人に警告を発し続けている。近代化と伝統文化、地域開発と環境問題について考える紀行。



「21世紀ヨーロッパの技術戦略」

里深文彦 著  
現代書館 2,300円(税別)

本書は、ヨーロッパが一つのEU経済圏として躍進するための戦略としての科学を見つめ、その可能性をあえて周縁国(スウェーデン、英ウェールズ)から考察し、21世紀の科学と社会のあり方を探求した本である。21世紀に入り、EU拡大の中、科学パラダイムは大変革期を迎えている。新たな技術進化は、従来の社会観と倫理を揺るがし、政治や経済を巻き込みながら、人びとの暮らしに大きな影響を与えている。この科学技術の発展を支えた要因が、ヨーロッパの風土に埋め込まれた諸条件にあった史的事実を検証しながら、21世紀の人類の知的可能性を探る科学史分野の書籍である。5年に及ぶスウェーデン、英ウェールズでの長期滞在研究を踏まえ、科学の転換期を展望し、目前に迫る日本の科学技術の変革のあり方を、多角的に考える著者の視点は、あくまでも柔軟で、人間の歴史と科学史の共生を提示している。



「もっと勇気を出して!」

カイサ・ラーション・ペリリンド 著  
津金レイニウス豊子 訳  
海竜社 1,400円(税別)

本書は、ある意味では現在の日本によく類似した状況下の80年代のスウェーデンで書かれたもので、多くの若者を励まし勇気づけ、その意識に驚くほどの変革をもたらした著書として、スウェーデン本国で大変評判になったもの。当たり前のように、自分1人ではわざわざ時間をかけてやってみようとはしないような、著者自身の経験に基づいた具体的なアドバイスやアイデアに溢れている。

事務局より

JISS  
インフォメーション

編集余話

●新しいデザインの所報第2号をお届けします。感想などをぜひお聞かせ下さい。米国同時多発テロが起こった日、私はストックホルムに居ました。「真珠湾攻撃の再来」との表現が飛び交う一方、日本の反応が全く報道されず、無気味と思われたかもしれません。

(川崎一彦)

●7月14日に日本テレビ系で放映された、「カネボウスペシャル21・21世紀の幸せな結婚」を見た。国民の9割がイスラム教徒で、女性は家にいるものという考えを持つバングラデシュと、結婚も同様に社会的には、ほぼ同等な考えのスウェーデン。この両極端の2つの国の恋愛と結婚事情を比較してのドキュメンタリー番組だった。冒頭から父親に手をひかれ働かされるバングラデシュの花嫁。女性が10代のうちに親同士で決めた相手と結婚するのが一般的らしい。私には想像もつかない世界だった。しかし、それも現実なのだ。それに比べ、男性も育児休暇を義務づけられているスウェーデン。見終わった後、何だか色々考えた。さて日本はどうなのだろう、と。しかし、どちらとも言えない。未だに同様に、世間体が悪いぞうだ。結婚前に一緒に住んで、お互い合うかどうかを確かめるのはとても合理的ではないか、と私は思う。ともあれ、私が10代の頃からとりわけスウェーデンに興味があったのは、もしかしたら「自立した女性」を感じる国だからではないかと思ってきた。男性に依存せず、1人の人間として自立している女性が多いスウェーデンは魅力的だ。男女平等は簡単なことではないだろう。しかし、精神的な平等意識はそう難しくないはずだ。日本もまず女性から精神的に自立していこうと思う気持ちが、何も思わないよりいい、と強く感じる今日この頃である。

(松元さぎり)

会員の動向

【新規会員】

●個人会員

阿部祐子、長内覚、後藤元一、田鍋幸子、平出哲也、三橋直子、荒木傳、佐藤季昭、佐々木奈々子、湯地光子、埜田和史、天間由希子

●学生会員

大北秀明、藤井亮二、上田ゆり

【退会会員】

(名称省略)

個人会員(25名)、学生会員(3名)  
法人会員(1社)

お詫びと訂正

No.320号で誤りがありました。ここにお詫び申し上げ、下記のとおり訂正させていただきます。

P4. 北欧諸国の女性とEU

五月女律子氏

誤：Assistant Professor

正：Lecturer

P9. 新任役員

評議員 五月女律子氏

誤：修士課程

正：博士課程

イベントの御案内

■シンポジウム 開催予定

「北欧の現在」

日時●11月27日(火) 13:00~

会場●東海大学湘南校舎 松前記念館講堂

プログラム

1. アイスランド/グズムンドゥル・ハルフダナルソン 氏  
「世界の中の北欧・北欧の中の世界」
2. スウェーデン/マリア・ピア・ボディウス 氏  
「民主国家建設プロジェクトとしての北欧」
3. ノルウェー/ルーネ・シュラーゲスタ 氏  
「福祉社会の過去と現在」
4. フィンランド/カイ・ニエミネン 氏  
「自然環境と文化」
5. デンマーク/ヨルゲン・グレーブル 氏  
「日常生活にみる文化」

■講演会 開催予定

「北欧の都市における環境と建築デザイン」

講師

吉田 武夫 氏 (東海大学芸術学科教授)

伊藤 大介 氏 (北海道東海大学北方圏文化学科教授)

小沢 徳太郎 氏 (東海大学北欧学科講師)

◎上記、シンポジウム(北欧の現在)と講演会につきましては、詳細が決まり次第、追ってお知らせ致します。

■第7回日本北欧学生シンポジウム

「大学生の意識を考える」

日時●2001年11月10日(土)15時~18時

場所●北海道東海大学マルチメディアホール 札幌市南区

主催:北海道東海大学北欧研究会、北海道スウェーデン協会

後援:(社)スウェーデン社会研究所、教育改革道民協議会

プログラム

基調講演

孝子 ブンゴード 氏

(在デンマーク、ユーロジャパンコミュニケーション社長)

学生シンポジウム

「日本と北欧の大学生の大学における目的意識の相違」

(スウェーデン、ノルウェー、デンマークからの留学生などが参加予定)

問合せ先:北海道スウェーデン協会事務局 TEL011-214-8444